

巻頭言

生き生きと生きるまちづくりの 実践としてみた防災の総合性

京都大学防災研究所教授

岡田 憲夫

防災に総合性が求められていることは、阪神淡路大震災から十年を既に越えたこの時期にもう一度思い起こしておく必要がある。確かに「総合防災」という考え方もいまではそれほど違和感をもって受け止められなくなってきたように思う。しかしその必要性は認められるが、具体的にどのように実行したらよいのだという反論に対して、まだ説得力ある知恵や知識が十分に紡げていないのも事実のようだ。

ここではそのことを安全で安心できる、まちづくりの実践という観点から考えてみたい。というのは、本来、防災はまちづくりと一体で実践していくと、もっと総合的に見て効果的になるに違いないからだ。しかし現実には、まだまだ防災とまちづくりはうまく結びついていないのが実情だ。

とは言うものの、「実践としての総合化」の芽はそこかしこで生まれてきている。私はそのような小さな成功モデルに、総合防災として研究すべき貴重な実践の知が隠されていると考えている。たとえば、愛媛県五十崎町（現内子市に合併）の、まちづくりグループの人たちの川との共存へのこだわり、それがもたらした近自然（多自然）型工法導入の歴史を少し、たどってみよう。

1980年代後半より、愛媛県五十崎町まちづくりシンポの会が、当時はまだわが国で主流であった治水対策工法に疑問をもち、スイス国に新しいモデルを求める形で訪問した。その後、教を請うたスイスの専門家から得た「川のことは川に聞け」というアドバイスを。これをもとに、行政との長いやりとりが始まる。時には緊張関係の下、時には足並みを揃えて、結果的には相互学習する形で近自然（多自然）型工法を地元の小田川に導入することになる。これがわが国の河川行政の大きな転換につながった。結果としてまちの人たちはこれまで以上に生き生きと生きるコミュニティを創ることができた。地域の人たちも行政も、それで川がより自然な形で生き生きと生きていると思えるようになったのである。これは「地域の命」と（地域の人が考える）「川の命」、「地域の活力」と（地域の人が考える）「川の活力」、「地域の交流」と（地域の人が考える）「川との交流」の折り合いを総合的に見出ししていくための巧まずしてなされた社会実験だった。

このほかにも東京都墨田区の雨水（利用）技術啓発運動と路地尊によるコミュニティ活性化のプロセスも参考になる。国技館の屋根を大きな雨水枡に見立てて、地下に貯留し、トイレなどの水に利用する方式を既に提案していた。五十崎町の取り組みと同じく、やは

り1980年代後半より、大きな展開が始まる。中心となるリーダーの出会い。それによって運動が躍動する。戦後の近代都市開発の過程で、いつの間にか自分たちの足元に降ってくる雨水はやっかいもの扱いを受けていた。このコミュニティ運動は、それまで雨水を排水の対象として扱うのが常道とする行政や専門家に対して、「昔返りの天水桶」に少し工夫を凝らし、雨水を尊ぶ路地のシンボルとみたててコミュニティの小さな交流の場に育てようという洒落た試みでもあった。また古い密集市街地において火災や地震、洪水などの多様な災害に備えて、いつでも避難できるように細い路を確保する事業を行政が行う。それに併せて生まれた小さな半端の空き地を住民が活用しようというアイデアでもあった。つまり面白いことによって生き生きとした自発的な地域の盛り上がりが生まれてくるというわけだ。(逆に防災の専門家を自認する者は、防災は100パーセント真面目で深刻な問題だと気負いがちになる。あるいは「たかが天水桶、ダムや下水とはわけが違う」と、ともすれば無粋な議論をぶつ悪い癖があるようだ。スケールの違う妙な取り合わせを比べることは論外と考えて、思考停止に陥り、自縄自縛のために創造性の芽を自ら摘んでしまいかねない。)路地尊は小さな町並みのデザインとしても認められ、ある学会から表彰もされたという。このようにして路地尊をシンボルにした雨水を活かす運動は、災害から「命」を守るとともに、コミュニティの日常的な「活力」と「交流」が同時にまるごとに進むことを目指した生き生きと生きるまちづくり運動に高まっていったのである。またこの8月の初めには、市民が中心となった雨水国際会議が開催された。雨水を活かす技術は今後、担い手となる匠や市民有志の手によりますます磨きが掛けられ、天水を珠玉のように活かしたい干天や渇水の常習国に知識技術の花粉が飛び広がり、風土や社会情勢に見合った芽を出すことが期待されている。

もちろん良いこと尽くめではない。何しろまちづくり運動というのは、長続きすることが求められる。そのエネルギーと勢いをいつもハイの形で保つのは難しい。路地尊発祥地の墨田区であるが、往時ほど住民の中に盛り上がりは今では感じられないようである。行政の手が離れるにつれて、施設や器具の維持を続けていくのも重荷になりかねない。しかし、考えてみると、「自然の川の流れ」に「瀬」と「淵」があるように、「まちづくりの川の流れ」にも同じことがあって不思議ではない。それは言い方を変えれば、緩急のビートが織り交ぜられて進行する音楽の調べにもたとえられる。そのような音楽のほうが生き生きと生きる律動感を呼び起こすであろう。

このようにアナロジーで伝えられても、科学的な知識技術の表現形式としてまだ確立していない総合防災のめざす知は、その分まだ未開拓の領域なのかもしれない。しかし確実に言えることは、防災を狭い領域に押し込めないおおらかさと雄雄しさを許容し、実践が求められるフィールドから知識や知恵を紡いでいくことに挑戦することの価値。そしてそれを体感し共感する臨床の場からそのいきさつを写し取り、居合わせたことの始終を内部観察し、伴走者として状況を総合的に診断する方法論を築いていくことが、けっきょく21世紀の防災の実効性を質的に高めていくことにつながるのだということである。自然災害学会はこのような視座に立って、新たなフロンティア科学を押し広げていく使命も担っているのではなかろうか。